

令和二年度

宮崎国際大学一般入学選考前期日程

【教育学部】

試験問題

国語

| |
|------|
| 受験番号 |
| 氏名 |

令和二年度 教育学部 一般入試 前期日程

一次の各問いに答えなさい。解答は各問いの選択肢①～④から選び、記号を解答用紙に記入しなさい。ただし、問一は漢字で答えを書きなさい。

問一 「コクセキ取得には煩瑣(はんさ)な法的手続きが必要だ」の「コクセキ」を漢字で書け。

問二 「今のまま石油を使い続けると資源枯渇はヒッシの状態だ」の「ヒッシ」に当てる最も適当な漢字はどれか。

- ① 逼死
- ② 必死
- ③ 必至
- ④ 逼至

問三 「彼はよく風情を解する」の「情」と同じ読み(音)の漢字熟語を持つ文はどれか。

- ① 浮生夢の如し
- ② 情熱的に活動する
- ③ 大勢の人が花見に来る
- ④ 国に請願する

問四 「快気／全快」と同じ関係になる最も適当な組み合わせはどれか。

- ① 従順／凶暴
- ② 日本史／世界史
- ③ 消火／鎮火
- ④ 逸脱／参与

問五 次の四字熟語の組み合わせのうち、すべて漢字が正しいものはどれか。

- ① 付和雷同・一念發起・異口同音・一挙兩得
- ② 天変地移・白砂青松・三寒四温・十人十色
- ③ 疑信暗鬼・一触即発・榮枯盛衰・我田引水
- ④ 一意専心・右往左往・初志貫鉄・前途洋々

問六 漢字「横」を含む熟語のうち、この漢字の意味が他と違うものはどれか。

- ① 横暴な政治を改める政治家を望む
- ② 政治は腐敗墮落し不正が横行する
- ③ 気力に満ちて縦横無尽の活躍をする。
- ④ 義兄の死後その財産を横領する

問七 「正しく読むためにはユルやかに読まねばならぬ。決して急いではならない。その本から学ぶためにも、その本を批評するためにも、その本を楽しむためにも、ユルやかに読むことが大切である」（三木清「如何に読書すべきか」より）のカタカナを漢字に直した時、同じ漢字を含むものはどれか。

- ① 余裕のある態度で名人との対戦に臨んだ
- ② 悪しき生活習慣は緩慢な自殺行為である
- ③ 寛容の精神を忘れず曲直理非を判断する
- ④ 遅疑逡巡の末、履歴書を出すことにした

問八 次の文章に標題を付けるとすれば、どのような標題が最も適当か。

ところでかように自分自身の読書法を見出すためには先ず多く読まなければならぬ。多読は濫読（らんどく）と同じでないが、濫読は明かに多読の一つであり、そして多読は濫読から始まるのが普通である。古来読書の法について書いた人は殆どすべて濫読を戒めている。多くの本を濫りに読むことをしないで、一冊の本を繰り返し返して読むようにしなければならぬと教えている。それは、疑いもなく真理である。けれどもそれは、ちやうど老人が自分の過去のあやまちを振り返りながら後に来る者が再び同じあやまちをしないようにと青年に対して与える教訓に似ている。かような教訓には善い意志と正しい智慧とが含まれているであろう。しかしながら老人の教訓を忠実に守るに止まるような青年は、進歩的な、独創的なところの乏しい青年である。（三木清「如何に読書すべきか」より）

- ① 老人の時代
- ② 進歩的独創的な青年
- ③ 自分自身の読書法
- ④ 多読と濫読

問九 「一生懸命努力し働くこと」を意味する四字熟語はどれか。

- ① 苦学力行
- ② 汗牛充棟
- ③ 粉骨碎身
- ④ 晴耕雨読

問一〇 四字熟語「因循姑息」の意味として最も適当なものはどれか。

- ① 問題の根本的解決を避け小手先の手直ししか行わないこと
- ② 同じまちがいを何度も繰り返し返して進歩が認められないこと
- ③ これまでのやり方を改めずその場しのぎの策を弄すること
- ④ 美しく魅力的な外見だが若々しさや生氣には欠けること

問一 「物事に熱中しすぎることを意味する表現はどれか。

- ① 満を持す
- ② 病膏肓に入る
- ③ 自家薬籠中の物
- ④ 飛ぶ鳥を落とす勢い

問二 次の文のうち、傍線部の表現の使い方が不適切なものはどれか。

- ① 議論で相手を言い負かして溜飲を下げるなどという卑しい行為は、心が広いと自称する人間のすることではない
- ② 威儀を正そうと努める山田の話し方が気になるが、あるいは私が気にさわるような事を言ったのかもしれない。
- ③ 水を差す意図を推測させる君の妄言であの仲の良かった田中さんと山田君が別れたといううわさを聞いた
- ④ いつも不機嫌そうな取り付く島もない応対を見ていると田中さんと親しくする人がいないのも頷ける

問三 次の文のうち、傍線部の漢字熟語を正しく使っているものはどれか。

- ① 画家を齟齬する編集者にはカサにかかった態度をとるものも多かった
- ② 弱い立場の著述家には編集者の方策を拒否することはできなかつた
- ③ 言葉に現れる微妙な要諦に捉われ過ぎるのが弱小文筆家の弊害である
- ④ 流行を作る華やかなジャーナリズムにも陰湿な権力の逡巡が存在する

問四 「ひどく痛めつけられること」という意味の四字熟語として最も適当なものはどれか。

- ① 意気消沈
- ② 人事不省
- ③ 艱難辛苦
- ④ 満身創痍

問一五 「去年の秋、朝日新聞の「音楽展望」で、子どもの時『カルメン』の闘牛士の歌がハモニカで吹けるようになってうれしかったことを書いた文章、すばらしかったですね。やはり文章の名人は違うと、（ ） 思いました」（丸谷才一の文章による）の（ ）に入る最も適当な言葉はどれか。

- ① 音をあげる
- ② 理にかなう
- ③ 舌を巻く
- ④ 半畳を入れる

問一六 熟語の漢字がすべて正しいものはどれか。

- ① 獅子奮甚
- ② 気色満面
- ③ 才気間発
- ④ 破顔一笑

問一七 （ ）内の言葉の使い方が最も適当なものはどれか。

- ① あれは（雲をつかむような話）で全くあてにはならない
- ② 取材依頼を（奇をてらう）事もなくやんわりと断られた
- ③ 政治の話になると（けんもほろろに）熱弁をふるう男だ
- ④ 変装を見破られた今、髪型で（糊口をしのぐ）必要もない

問一八 次の文章の空欄（A）・（B）・（C）・（D）・（E）に入る言葉の組み合わせで最も適当なものとはどれか。

「読書にも年齢があり、（A）は古典的なものを好み、（B）は新しいものを求めるというのが普通である。（B）が新刊書を喜ぶということはその（C）の旺盛を示すものであって排斥すべきことではないが、しかしそこにはまた単なる好奇心の虜になる危険もあるのである。古典のために新刊書を（D）することなく、新刊書のために古典を（E）することのないようにするのが肝要である。」（三木清「如何に読書すべきか」より）

- ①（老人）・（青年）・（知識欲）・（軽蔑）・（忘却）
- ②（高齢者）・（若年層）・（向学心）・（理解）・（無視）
- ③（学究）・（ジャーナリスト）・（職責観念）・（等閑に付）・（ネグレクト）
- ④（中老年）・（若者）・（向上心）・（過小評価）・（過大評価）

問一九 四字熟語「（ ）学阿世」「紆余（ ）折」の空欄（ ）に入る共通の漢字はどれか。

- ① 回
- ② 折
- ③ 曲
- ④ 直

問二〇 「人間万事塞翁が馬」と近い意味のことばはどれか。最も適当なものを選べ。

- ① 怪我（けが）の功名
- ② 終りよければ全てよし
- ③ 禍福はあざなえる縄の如し
- ④ 雨降って地固まる

問二一 「采配を振る」の使い方として最も適当なものはどれか。

- ① 采配を振るという表現は商売に従事する人特有の行為に由来している
- ② 外国に出る時は采配を振る適当な時期を心得ておかなければならない
- ③ 実戦の経験に乏しい人が監督として試合の采配を振るべきではない
- ④ 旅は人生の最良の学校だという古言の真実に深く采配を振る思いだ

問二二 熟語「杞憂」の使い方として最も適当なものはどれか。

- ① 優雅な物語が多く書かれた事実が時代の杞憂を理解する手掛かりだ
- ② 産業革命が世界史にもたらした否定的な杞憂も見逃してはならない
- ③ ベテラン刑事の引退で懸念された犯人確保の困難も杞憂に終わった
- ④ 松尾芭蕉「奥の細道」を慕って今も俳聖の杞憂を辿る人が絶えない

問二三 「ヒアリング」の意味の説明として最も適当なものはどれか。

- ① 事故などの発生時に利害関係者から事故関連の事情を聴取すること
- ② 運送業界などで使用される正確な配達時間を自動的に告知する装置
- ③ 一定期間の大体の支出を計算して前以てある金額を預けておくこと
- ④ 先進国が生産しすぎた工業製品を中進国などに安く販売すること

問二四 傍線部のカタカナ語を正しく使っているものはどれか。

- ① 歩道や車道などにインフォームドコンセントの概念を導入する必要性を論じる
- ② シミュレーションを重ねた未来の姿をもとにどんな学生生活を送るかを考える
- ③ 酸性雨の影響の解明には原因物質の排出量のデリバリーを行うことが必要である
- ④ 複雑化した社会に生きる現代人はユニバーサルデザインの危機に晒されている

問二五 カタカナ語「デフォルト」を正しく使っているものはどれか。

- ① うまく作動しない時には一旦デフォルトの状態に戻すことにしている
- ② 昨日アメリカから帰ってきたばかりなのでまだ体がデフォルトである
- ③ この際政治的なつながりを利用してこの大きな取引をデフォルトしたい
- ④ 有機排水を安全にデフォルトする法律がない国を対象にすることはできない

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。解答は問いの選択肢①～④から選び、記号を解答用紙に記入しなさい。

私は「御菓子丸」という屋号でお菓子作りをしている。江戸時代から続く和菓子屋と言われたら、なんとなく信じてしまう様な、そして一度聞いたら忘れられないユーモアをこめて、この屋号を考えた。また、禅の円相に通じる普遍的なものを作りたいという気持ちも込めている。

和菓子屋と言っても、今は店はなく、自分が出向いてお客さんの前で作り立てのお菓子をふるまったり、喫茶室に定期的にお菓子を納品したり、箱詰めされたお菓子を商品としてお店に納品したり、というのが現在の仕事だ。

なぜ、私がこの仕事についたのか。まずは十五年前に巻き戻して話を始めたいと思う。命あるものはやがてこの世から旅立つ。人はそのことを知りながらも生きる。それはどうということなのだろう。

十分な時間があつた大学生の時にそんなことばかり考えて学生生活を送っていた。

それと同時に、何者でもない自分はこれから先、何をして生きていこうか、どの様に生きていこうか、とも考えていた。「どうせ生きるなら、この瞬間を全うしたい」。なぜ人は生きるのかという問いに対して考えれば考えるほど、その想いの純度は高くなっていった。そして、その想いを叶（かな）える方法として、食べ物で表現するという答えに至った。

目の前にあつた物が、食べると無くなってしまふ、その人の体の中に入つてしまふ、そんな当たり前のことを大発見した気になつて、「これだ」と確信した自分がいた。その確信は今でも変わらず私の中にある。A「どうせ生きるなら、この瞬間を全うしたい」という

言葉は「食べて無くなるものだからこそ、美しい瞬間を作りたい」という言葉に翻訳されて私の仕事となつた。お菓子という刹那的な素材、でも印象として残るもの、普遍的なものを探し続けている。

食べ物の中でも和菓子の道に進んだのは、最初のきっかけとして一冊の本を手にとったことから始まった。『Wagashi 和の菓子』

その本には一ページに一つのお菓子、一つのお菓子には一つの情景が込められていた。一つの情景というのは和歌を詠んで心の中に現れる映像のことで、それがお菓子の色形になって表現されていた。

こんな食べ物があるんだと衝撃を受けると同時に、花鳥風月の世界で語られるには留まらない可能性を感じた。和歌の世界だけでなく、今この世界で見ている情景をお菓子に閉じ込めることはできないのだろうか。そこから和菓子を作り始めて十数年、今でもその可能性は感じ続けている。

私が学んだ和菓子は茶席菓子と部類されるもので、文字通り茶席で出されるお菓子である。お菓子を作り始めた頃は、その茶席菓子をベースに、お菓子を美術作品として成立させたいと熱い気持ちで向き合っていた。食べて無くなる作品。壊れない限り存在し続ける美術作品に対して、お菓子は鑑賞者の体の中に入っていく作品。その瞬間を味わう作品。

ある現代美術のギャラリーオーナーは「お菓子は美術作品にはならない」と言った。その当時は悔しくて、絶対成立させてやると意気込んでいた。今もまだその熱い気持ちが無い訳ではない。ただ、食べ物である以上美味しくなければならぬ。見た目がいくら美しくても食べた時の感動がなければ残念だ。

お菓子が作品として成立するかどうかは措いておいて、これまで「美味しい」ってなんだ、と自問自答し続け、視覚、嗅覚、触覚、聴覚、味覚、色んなアプローチでお菓子を作ってきた。心花やぐような形、香ばしい香り、触り心地のよさ、噛んで響く音、五感を直接的に刺激することは食べ物が一番おもしろいところで、やはりここに魅力を感じる。

大げさかもしれないが、五感を使って食べることは、自分がここにいることを確かめることでもあると思うている。お菓子が体の中に入っていくことで、その人の内から感覚を刺激する。

お菓子を作り始めてから、ずっと何をして生きていこうか、という問いに対して答えを出し続けてきた。

どの様に生きていこうか、という問いに対してはどうだろう。今一番身近にある答えは「日常にある非日常」を叶えるということ。文字にすると堅苦しい話のようだが、それは子供の頃に食べた飯事（ままごと）の楽しみと近い。砂に線を引いただけで部屋になり、摘み取った草がごはんになる、いつもと同じ場所がある仕掛けによって違う世界に見える、私はそんな仕掛けをお菓子で作りたいと思っている。子供の頃に食べた飯事の楽しさは大人

になった私の心に色褪（あ）せることなく存在している。

いつからか人は大人役を演じるようになり、子供の時に感じた喜びを、思い出としての心の奥に仕舞ってしまう。

そんなことは寂しい。大人だって子供と同じぐらい、あるいは、それ以上の、生きて培ってきた分のわくわくを感じるべきだと私は思う。年を重ねるってこんなに楽しいんだよ、と子供たちに胸を張って言えるように。実際、私の周りにはわくわくし続けている大人がたくさん居て、その人たちはいつも私に憧憬の念を抱かせてくれる。

「日常にある非日常」を体現している知人がいる。職業はギャラリーオーナー。彼女の家は、展示会が開かれる時、ギャラリーに変わる。展示会が終わった時、いつもの家に戻る。朝ごはんを食べた空間が、数時間後たぐさんのお客さんが出入りする空間に、そして、最後のお客さんが一人帰った瞬間にほっと一息お茶を飲む住処となる。ここでは日常と非日常と同じ場所で繰り返り広げられている。

日常から非日常へ、非日常から日常へグラデーションを描いて変化する様子は、まさにB私が目指しているお菓子の在り方と相通じるものがあり、今、彼女と仕事をしているのは引き寄せられた必然なのかもしれない。いつもと同じ場所がある仕掛けによって違う世界に見える、あの頃の喜びを思い出させてくれる場所。

自分の生活、大きく言えば、人生でも「日常にある非日常」を感じたいと思っている。うつろう空の色を眺めること、河原で拾った石を手中で転がすこと、自転車に乗って季節の風を切ること、つやつやのごはんを食べること、お気に入りの器に料理を載せること、饅頭の皮を手で捏（こ）ねること、こぼれた砂糖を眺めること、コマを回すこと、美術作品に向き合うこと、知らない言葉に出会うこと、音の響きを感じることに、愛する人たちと言葉を交わすこと。文字にして並べると、とても普通なことかもしれない。でもそんな普通の中にスイッチは必ずある。そのつまみを少し捻（ひね）るだけで、当たり前だった物や気色が、違うものに生まれ変わること、何度も味わってきた。砂に線を引いて部屋を作り、摘み取った草を「ごはんにする、その先にこんな沢山の味わいが待っていたと思うと、生きることは楽しいし、その喜びの中にお菓子作りがある。

美しいってなんだろう、美味しいってなんだろう、「日常にある非日常」とは、と湧き上がる疑問に対する答えが出るまで私はお菓子を作り続けると思う。もしかすると答えは出ないのかもしれない。冒険家の様に誰も見たことのないものが見たいから、「これが答えです」と言われても満足せず、また答えを探す旅に出る。そんな性分だから仕方ない。新しいお菓子を閃き、それが具現化された時の喜びは何にも変えられないのだ。

この先、作ってみたいお菓子が二つある。一つは甘くないお菓子。和菓子の歴史を振り

返れば、十六、七世紀には「調理物」といって甘みのない、現代でいうと料理と認識されそうなものが茶席菓子としてお茶とともに嗜まれていた。その文脈に沿って甘くないお菓子をすることは、もしかするととも自然なことなのかもしれない。甘くない食べ物を作ったとしても、「お菓子」と呼ぶことにこだわり続けるのは、そこに「日常にある非日常」を作りたい想いがあるからだ。

もう一つは、視覚要素をどんどん無くしていくこと。先日ふと、気付いたのだ。視覚、嗅覚、触覚、聴覚、味覚、これまで視覚と嗅覚、視覚と触覚、といつも視覚がなければならぬと固執していたのはなぜだろうと。五つの感覚をもっとニュートラルに捉えて、時には嗅覚と触覚、触覚と聴覚に訴えるようなお菓子があってもいいはずなのだ。実際、これまで手に触って口に触れて柔らかさを感じるもの、一色なのに、味わいはいくつもの色を感じるもの、などを作ってきた。もっともつと五感というカテゴリーズされたものを越えていくと、その先に美しさや美味しさがあるのではないかと、新たに試してみたいのだ。

その時、感じた自分の閃きを形にいくことしかできない。閃いて、試して、失敗して、閃いて、試して、形になって、の繰り返し。

今日もそんな日常の中で何かを探し続けるために私はキッチンに立っている。

(杉山早陽子「日常にある非日常」『図書』2019年6月号より)

問一 傍線部A。「どうせ生きるなら、この瞬間を全(まっとう)うしたい」とはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び。

- ① 人生は限られたものであるからこそ、瞬間瞬間を充実したものにしていきたい。
- ② 人生ははかなくむなしなものであるから、瞬間的に輝いても意味は無い。
- ③ 人生は限られているからこそ、できるだけ長生きしたい
- ④ 人生は結構長いものであるから、気の向くままに好きなように過ごしたい。

問二 傍線部A。「食べて無くなるものだからこそ、美しい瞬間を作りたい」とはどういう意味か。次の中から最も適当なものを選び。

- ① お菓子は味あってこそのものであるから、瞬間的においしく感じられるものになりたい。
- ② お菓子も人生と同じく一時的な存在であるから、できるだけ多く味わいたい。
- ③ お菓子は食べられて無くなる瞬間的なものだからこそ、美しく感動的なものをつくりたい。
- ④ お菓子は食べられて無くなる物だからこそ、必然的に美しいものとなる。

問三 傍線部A。「翻訳されて私の仕事となった」とはどういうことか。次の中から最も適切なものを選ぶ。

- ① 長い人生を気楽な充実したものにしたかと思ひ、お菓子作りを仕事に選んだ。
- ② 人生とお菓子が「限られた物」として重ね合わされ、お菓子作りが仕事になった。
- ③ 長生きしたいという思いがお菓子作りというのんびりした仕事を選んだ。
- ④ はかない人生で、同じくはかないお菓子作りを生きていく手段として選んだ。

問四 傍線部B。「私が目指しているお菓子の在り方」とはどういうものか。次の中から最も適切なものを選ぶ。

- ① 「日常にある非日常」を作りたいという想いをかなえたお菓子
- ② 五つの感覚をニュートラルにとらえ、感覚を無くしたお菓子
- ③ 「非日常の中にある日常」を見出したお菓子
- ④ 日常から非日常へ、非日常から日常へグラデーションを描いて変化を見せるお菓子

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。答えは解答用紙に記入すること。

(注…原文の冒頭・末尾を一部省略している。)

材木屋の父が没落したのは昭和三二年の諫早(いさはや)大水害で材木を一切合切流されてしまった以後のこと。

長崎市上町の、部屋が一二もあつて庭に築山(つきやま)と池のあるような大邸宅から、新中川町の、ジメジメとした台所のほか二間しかない二軒長屋に引っ越したのは僕がちょうど小学校一年生の終わりだった。

狭い家に移つて後も、花好きの母は、財布に僅かな余裕があれば、長屋の前の坂道を天秤棒を揺らしながらゆらゆら上つて行く花売りを呼び止めて仏花、あるいはちやぶ台に飾るささやかな花などを買い求めた。

庭と呼ぶのも恥ずかしい二坪ほどの庭を、母が耕して小さな花畑を作つたのは祖母が亡くなつた翌年のことだったから僕が四年生か五年生の時か。

伊良林小学校の校舎の三階以上の一番南の角へ行けば我が家を見下ろすことが出来た。授業の合間に廊下の窓から母を呼んで手を振ると、大盥(おおだらひ)に洗濯板を使って洗ひ物をする母が笑いながら手を振り返してくれた。

貧しいけれども不幸せではなかった。

祖母は長屋に転居して二年後に寝たきりになったが、母は姑によく仕えた。

祖母も「喜代ちゃん、喜代ちゃん」と母をととても愛した。

後に聞いたことだが母は大好きだった姑に一つだけ不満があったようだ。

それは僕が生まれたあとのことで、母が若い頃に肺浸潤を疑われたことがあった、という一点で祖母から授乳を制限されたこと、いつのまにか夜寝るときには赤ん坊の僕を祖母が抱いて寝るようになったので、母にしてみればなんだか長男を盗られたような気持ちがあった、というようなことを大分大人になってから僕に告白したことがあった。

「婆ちゃんっ子は三文安い」などというけれども、まさに僕は三文安い婆ちゃんっ子だった。

幼い頃、家を出て外へ遊びに行くとき必ず祖母がついてきた。

町内の「まるた」という駄菓子屋の前で祖母は毎日懐（ふところ）から一円札の束を出し、ゆっくり数えて僕に一〇枚くれた。

一〇円で森水ミルクキャラメルを買う。

これが僕の日課だった。

お腹が空くと家に帰り、祖母は僕が命じる形の小さなおにぎりを作った。

まん丸、三角錐、サイコロ型、俵形などの塩むすびが僕は大好きだった。

小学一年生になったすぐの四月一〇日。

父の店の経営は火の車のはずだが、まだ追いつめられる前、生まれて初めて母が僕の「誕生会」を開いてくれた。

祖母は優しい笑顔で「まあ坊の一番好きな物をあげるからね」と言った。

毎日一〇円もくれる祖母がいう「一番好きな物」とは一体どれほど素晴らしい物か想像するだけでドキドキするほどだったが、もうこの頃は父は祖母にお小遣いを渡す余裕がなくなっていたのだということには大人になって気づいたことだ。

当日、小学校の同級生や町内の遊び友達を呼びテーブルに並んだのは母が腕によりをかけたタコウィンナーやポテトサラダ、鶏の唐揚げにハンバーグ、卵焼きにショートケーキと、まさに子どもにとっては満漢全席（注1）のようだった。

沢山の仲間にも祝ってもらい、プレゼントが山と積まれたその日、期待した祖母からの「大好きな物」とは、果たしてテーブルの中央に山と積まれた様々な形の塩むすびであると知ったとき、僕は酷（ひど）くがっかりした。

こんなものいつでも食べられるじゃないかとふてくされ、なんと手も付けなかったのだ。やがて子ども達は家の外で遊んだ。

だが、僕は遊びを楽しめなかった。

祖母の塩むすびに全く手を付けなかったことが頭から離れなかったからだ。

慌（あわ）てて独り家に戻ると薄暗い台所に祖母の背中が見えた。

出来るだけ陽気に「ただいま！」と叫び、祖母に近づいてみると、祖母は先ほどの塩むすびを茶碗にとり、茶漬けにして食べようというところだった。

僕が大きな声で「ああ、お腹空いた、おにぎり食べよう」と言うと、祖母は困ったような、優しい笑顔で言った。

「よか、よか。あんたはお腹一杯だから食べなくていいとよ。気を遣わんでいいから。

遊んでおいで。おにぎりはみーんなおばあちゃんが食べるからね」

僕は号泣しながら祖母に謝罪し、おにぎりを口一杯に頬張った。

涙の味か塩の味か分からなかった。

祖母の塩むすびは今でも僕の胸にある。

僕はちやほやされるとつけあがる性質で、人の痛みに気づかない事があるのだ。

そんなときテーブルの向こうに祖母が座るのが見える。にこやかに、優しく、そっと僕の増上慢を叱りに来るのだ。

大人になっても僕が自分で自分の誕生会をやらない理由はこの塩むすびの思い出にある。

祖母がその手で結んだものは「愛」そのものであったと思う。

孫の無礼さ、人としての思いやりのなさに対して、怒りをぶつけるではなく、厳しく戒（いまし）めるでもなく、ただただ愛で抱きしめてくれるという叱り方が存在することを教えてくれたのも祖母であった。

祖母が亡くなって翌年から、母の猫の額ほどの庭いじりが始まり、季節の小さな花が咲いた。

次の年の春、近くの川の畔（あぜ）に大輪の深紅の薔薇が一輪咲いていたのを弟と二人で根ごと引き抜き、そのまま母の花畑に植えてみたら、驚いたことにその花は根付き、毎年少しずつ花の数を増やした。

祖母が亡くなった後は、思い出したように母が祖母の塩むすびを作ってくれることがあった。

「おばあちゃんみたいには上手に握られんばってん」と言いながら、妹相手に『三角』『四角』『まん丸』などと作ってくれたものだった。

この頃は父が最も不遇な時期で、家は貧しかったが、母の明るい性質のお陰で少しも暗くなかった。

母の握ってくれる塩むすびは微かに桃の花の匂いがした。

手肌が荒れて困っていた母が使っていたのが『桃の花』という安価なコールドクリームで、その名前のとおり桃の花の匂いがした。

母の塩むすびに付いた桃の花の匂いが本当は嫌だったけれども、このことは一度も母に言えなかった。

この長屋暮らしは五年ほどで、長崎市郊外の新興住宅地に移住して、新しい一軒家での生活が始まった。

A父の最も不遇な時期のこの長屋での思い出は、何故か今もみずみずしい光を放ちながら僕の胸の内にある。

注1…満漢全席／山海の珍味を集めた高級中国料理。

(さだまさし「塩むすび・三文安い・桃の花」『図書』2019年6月号より)

問一 傍線部A。長屋時代の思い出が筆者の中に「みずみずしい光り」を放つものとして残っているのは何故か。三五字以内で答えよ。句読点も一字と数える。

問二 あなたは筆者の「祖母」の愛の在り方をどのように考えるか、四〇〇字以内で述べよ。なお、祖母への賛否等は採点には影響しない。(解答は原稿用紙に記入のこと)